

---

# **余乃弥美驟雨の物語 ~ 悪魔とコイに墮そうになる俺~**

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

余乃弥美驟雨の物語 ～悪魔とコイに墮そうになる俺～

### 【Zコード】

Z8636C

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

俺こと、余乃弥美驟雨は人以外の者たちがうらつく平和な?この  
世界においてリッチな生活を目指している。 そうなるにはやっぱり  
なんでもしないといけないので今日もがんばって生計を立てるため  
に仕事をこなしているのだ!

(前書き)

思いついで浮かんだ小説ですが、一気に最後まで書けたのでよかったです。この小説について思ったことがあれば感想、またはメッセージで送ってくれると反応しやすいのでよろしくお願ひします。

俺は今、悪魔とコイに堕ちしきになつてゐる。

「だーつーーしつかり掴め！」

「やつてやつてー！」

彼女は綺麗だ。そして、足だって細い・・・

「いつまで私の足を掴んでるのよー！」

「お前がもとはといえば悪いんだらうがー！」

顔を上げればパンツだつて見ることができるわつなこの状況・・・

「き、來たぞ！奴が顔を出したー！」

「マジ！？つて、何！あの大きさはー！？」

「この状況じゃ捕獲も何もできねえぞー！」

「」の状況、少し前にさかのぼる。

俺の名前は余乃弥美驟雨よのやみじゅう

人類とそうでないものたちが平和に暮らしているといえば聞こえがいいのだが、裏ではさまざまなことが起こっている。そういうのを解決するのが俺の仕事なのだが、今回は簡単だと思つて手を出した。無論、そういうのを職業としている連中は結構いるのだが、俺の場合にはどうやら貧乏くじを引いてしまつたようだ。

「裏井戸に鯉を落としてしまつて・・・捕獲してくれんか？夜に外を出歩くと危険だからのう・・・」

そういうわけで俺はのこ夜に裏の井戸に行つたのだ。そこいらを歩いていた悪魔に事情を説明して報酬半分個と言つことで協力を得たのだが・・・

「のわつ！何をするんだ！」

「へつへつへ！契約も結んでない悪魔を信用するとは愚かねえ！」

俺はその悪魔に突き落とされたのだった・・・・だが、

「くそお！道連れじゃあ！」

がしつ！

「なつ・・・・」

井戸<sup>いど</sup>きつぎりにいた悪魔の足を掴んでそのまま井戸<sup>いど</sup>に落ちる・・・しかし、悪魔のほうは運よく井戸<sup>いど</sup>の端を掴むことに成功したらしい。それから數十分経つて今の状況に至つている。

「ぜ、絶対に離すなよ？落ちたらあの口<sup>くち</sup>に食われる！

「誰が・・・離すもんかあ！つて、あんたが落ちればいいんじょ

！」

「元はといえばお前が俺を突き落とすからこんな状況になつてるので

！」

「顔を上げるな！パンツを見るな！」

「てめえもきちんと片手で掴んでないで両手で端をつかめや！助かつたらきちんと謝つてやるからよ！」

ざぱーん！

井戸<sup>いど</sup>が深くて助かつたといえよう・・・下のほうではめちゃくちやでかいコイ<sup>コイ</sup>が口<sup>くち</sup>を上のほうににしてパクパクしている。しかしまぁ、なんであんなに大きくなつてるんだ？聞いた話じやもつと小さいはずだつたと思うのだが・・・

「何かいい方法はないの？」

俺は悪魔の動く尻尾<sup>しり</sup>をじつと見ていて急に頭に電流<sup>でんりゅう</sup>が走つたようになつた。

「・・・ある

「どんな？」

「……男の肉はおいしくないだらうから……」

悪魔の足を掴んだまま、井戸の壁に足をつけてそのまま上に上がる。そして、自分だけ取り合えず井戸から這い上がると……「……お前を落とす。残念ながら俺は悪魔と「マイ」に墮ちるほど落ちぶれちゃいないんでね」

必死に掴んでいた悪魔の手をはずしてそのまま落とす。

「ひ、卑怯者」!!

そういうながら悪魔は墜ちてこつた。さよなら、一時の恋人よ。・・人は他人を蹴落として上に上がつてこくもなのだ。まあ、もつとも・・・

ばくつ！

悪魔は見事マイに飲まれたようだった。

「よつしゃ、ヒット！後はお前のマイの行いがいいことを信じてろよー！」

もつて来ていた特殊な紐を思いつきり引っ張る。

「ふによお～根性！根性！」

俺の力がどのくらいかわからんが、とりあえず紐はだんだんと上がってきて・・・

「せりゃああーー！」

マイがそのままお用様にその姿をくつきと残すと近くの池に着弾。思いつきり引っ張った紐はそのまま俺に直撃・・・

「ぐはつーー！」

「きやああー！」

どうやらこの悪魔のマイの行いはよかつたようで、飲み込まれてはいたものの、どこにも怪我はしていなかつたようだ。

「あいたたた・・・

「あ～よかつた、何とかこれで報酬はもらえたぜ むじこさん、

俺、貴方のマイをつかまえましたよ」

お尻をさすつている悪魔を置いたまま、俺は依頼主であるむじこ

さんの元へと向かったのであった。

「・・・おじいさん、これ・・・なんでしょう？」

「これかあ？これはなあ、先祖代々我が家に封印されていた刀じゃあ・・・ちなみに、掴んだらお前さんが死ぬまでつきまとわれるぞお・・・」

「お、おじいさん！俺、掴んじゃったんですけどー！刀ってどんな感じかなって思つて掴んじゃつたんですけどー！」

「何？この若者が気に入った？ほほほほ、元気のいい若者はわしも好きじゃあ、お前さん、話がわかるいい奴じゃなのう・・・」

「じいさん！誰と話してるの？え、何刀に視線を送ってるの？」「こんなのいやあああああー！」

「ね～報酬もらつたんでしょ？約束どおり私に半分ちょうどいよー！」

「・・・すまん、それが色々あつて半分個しようにも出来なくなつたんだ・・・」

「なんでよー！その刀なんでしょ？」

「・・・そうだよ、そんなんだ！そんなに欲しいなら、この刀を上げよう。何、すぐに売つてくれればいいからね 大丈夫、きちんと君にも所有権は半分あるから・・・いや、打つたお金は君が全額もらつて構わないよ」

「え、マジ？うれしい！」

思つたとおり、自分では取れなかつた刀は悪魔が掴むことで簡単に取れた。そして、駆けていつた悪魔をよそに、俺はその場から一刻も早く逃げ出したのだった。所有権はあつちの悪魔にもあるので今頃ひつついで取れなくなつていてるに違ひない。くくく・・・いざまだな！

「それ、逃げるー」

「までーい！これ、とれないじゃないのー！うなつてゐるの、これ？」

「俺のせいじゃなーい！！」

悪魔をまぐのにお金を何枚かまかなくてはいけなくなつたことが  
俺の一生でもっとも恥じるべき行為だつと日記に書いてしまつた俺  
だつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8636c/>

余乃弥美驟雨の物語 ~悪魔とコイに墮そうになる俺~

2010年10月8日15時28分発行